

カンジキ

○按ズルニ、股引バツチノ事ハ、服飾部服飾雜載篇ニ在リ、參看スベシ、

〔易林本節用集加〕カシキ 橋泥行

〔書言字考節用集七〕カシキ 橋太平記 桐同 鞆同

〔倭訓栞前編六〕かじき 仲正の歌にかじきはくとよめり、北國にて雪深き時ははく物也、標をよ

めり、略○中 又がんにじきともいへり、太平記にも見ゆ、軍用にもする也、今俗皮にて去たる物をがん

せきといふは、かじきの訛也といへり、四國にては熊手をがんせきといへり、

〔物類稱呼器用〕橋かじきかじき 畿内にて、なんばといふ、今按にかじきは、くろもじの木を

たはめて輪となし、繩にてあみ革の紐をつけ、大壹尺ばかりあるもの也、北越及奥羽などにて、雪

沓をはき、かじきを結び附て、道路を踏かたむるに用ゆ、畿内にてなんばといふは、深田の泥の上

を行ものにて、是則かじき也、

〔和漢三才圖會三十〕標 橋史 桐漢 擗説 俗云加牟之木

虞書云、禹王山行所乘者、以鐵爲之、其形似錐、長半寸、施之履下、以爲上山不蹉跌也、

按如越州北地雪深而不乘、輻不能行、不著標不得上山也、南方人未嘗見者也、

〔飛州志七〕著御類 井 名品

輪カン。ジキ。 下民積雪ノ上ヲ歩行スル雪沓也、熊柳ト云フ木ヲ以テ、亘一尺餘ノ輪ト成シ、其輪

ニ爪ヲ三ツ造リ、又輪ノ中央ニ板ヲヲタシ、是ニ草履ノ如キ緒ヲ作り、脚下ニハキテ往來スル也、

鐵カン。ジキ。 鐵ヲ以テ三ツノ爪アルモノ也、草鞋ノ裏ニ付テ用ル也、

〔夫木和歌抄十八〕法輪寺百首寄雪述懷

かじきはくこしの山路の旅すらも雪にまづまぬ身をかまふとか

〔山家集上〕雪のうたよみけるに

源仲正